女の会通信

■特集・私にとっての反核・反戦
- 極私的反トマ反核ウンドー 184
- なぜストップ・トマホークなのか
- 被爆者と生きて

■トマホークとは何か
■原爆の図ながさき展

1984.8.5

発行者	長崎市中園町4−17（山田善子気付） 「女の会通信」編集委員会　TEL(44)8842	印刷 あど印刷	1984 8 5

私にとっての

反核・反戦

暑い夏。長崎の八月。八月がめぐってくるたびに「被爆地長崎」を思わずにはいられません。地球上に数万個の核兵器が配備されているという現実の中で、外国の草の根反核運動が日本でも紹介されていますが、日本のマスコミ等のアンケートでは、半数以上の人が「非核三原則」は守られていないと考えているにもかかわらず、日本の反核運動はあまり広がりを持てずにいるという悲しい現実があります。

再び戦争を許さないために、私達ひとりひとりが今何をしなければならないのか。何ができるのか。それぞれの反核・反戦の思いが形となり行動となり連帯となって、戦争をおし止める力になってほしいと思います。

ひとりひとりの行動の糸口となり力となることを願って、今回は、草の根運動を続けてこられた三人の方々に登場していただきました。

『極私的反トマ反核ウンドー'84』

非核市民宣言・サセボ

F・H

8月になれば、まるで季語の如く、反核特集がマスコミを賑わす。ところで、私にとって今年のハンカクは、6月17日反トマ集会で、終ってしまった。なんつう冗談も言えない訳で、トマホークを積んだ船も、早晩サセボにも来るんだし、少しばかりフンドシ締めるかというところです。もっとも、自分はCOOPのパンツですが!! それは—それとして、先日某国営テレビ長崎支局製作の反核討論特集があったんだけど、その内容の重さに比例して、そのネクラなことはおびただしかった。主として、その責は某放送局にあったとは思うけど、反核運動に限らず、様々な社会運動の多くがケンイとか、知識、はたまた組織に重きをおいている場合がある。反核運動がフヘン的に展開されているのではなく、それが普遍的に存在しているということを、今更確認することがないのは悲しいことだ。とはいえ、反トマをどう闘うのかということは、少なくとも私にとって、やはり重いこ

とであり、それ故に軽薄に聞っていきたいと思うのであります。（私は短小ではないがために!!）などと、今風に全部書ければヨイのだけれど、それは疲れてしまふので、今度はアジ調でゆきたいけれど、それもまた疲れることなので、マイペースでいってみたいと思います。

ところで、「6月反トマ斗争の大高揚」てな調子のセクト機関紙をみてたら、なんと天真ランマンな！そーてまたボキャブラリィの圧倒的な不足!!ということに思いいたり、それもそれ、私が見ていたその年（ご免なさい？）の機関紙といえば、「婦人民主新聞」（妻がとっている）ばかりなのであるからでした。5月13日から6月17日というスケジュールの、反トマ全国キャラバンにしても、6・17横須賀集会（5千人）、佐世保集会（百二十人）にしても、これはやるっきゃないという義務感とはウラハラに、ああいつまで日本はこんな風なんだろという、軽いゼツボーにうちひしがれるのです。それというのも、去年のカールビンソン・エンプラ・ミッドウェー、その前の「むつ」そしてそのはるか前のエンプラ・原潜と、我が愛する町は、いつも外から規定され、〝外人部隊〟にホンローされ、主体的な運動の、いや住みよい町づくりを防害されて来た歴史を、つらつら思んみるに、ということだったからでした。いわゆる「軍港宿命論」というやつだ。私たち、サセボに生きていこうという人間にとって、それに対抗できるロンリというか、方途というか、それは形がまだあるものではないが、自分の肉体のなかにジョジョに出来ているということだけは、いっておきたい。

などと、つい地がでて、大状況を述べることになったりして、赤面してしまう。本論文の主旨は、いかに小状況に拘泥しつつ、反トマサセボ斗争を語ることにあるのであった。小状況はといえば、こんな風景なのだった。6月17日の集会は、数千人は入るという松浦公園に、こじんまりと九州の各地より集ったものだった。そして、少しは中身のあるものにせんとて、アジ演説をなるたけ排し、よくよく話し合う、更には、無農薬の野菜もありまっせ、という具合に、一味くらいは違ったものではあった。欲をいえば、飾りではない音曲の類いが、ではあるけど、私はつつしみが深いので欲張らない。という集まりであったが、佐世保から出席？した人間は二十名足らず。有力参加者と目されていた魚屋のカミさんは、会場のそばまで来ていつつ、とうとう帰ってしまった。後で聞いてみると、「赤旗とかあったでしょ。こわくて帰ってしもうたとよ」てな集会であって……。

このようにして限りなくはなばなしくスタート

した「非核市民宣言・サセボ」というのは、実は実体のないものだったりして、ホントは、去年のカールビンソンの時以来、目標五百人の市民から私的反核宣言を出してもらい、その百字分の原稿をば、精力的に集めといたら、今ごろは、サセボのウンドーも盛り上がっていたハズなんだけど、とても、そんなヒマがなかったりして。

ヒマがないといえば、去年から今年にかけては、ヒマがなかった。一年有余、妻が外に出ていたので、一応流行の主夫業も相つとめ、三人の子育てなんかも、バッチリということで、私も地についてきたなと思っていた矢先、彼女が外の仕事を止めた。とかく、人間関係というのは疲れるもので、止めた後もそれは尾を引き、家に帰って来た主婦と主夫の間で"問題"が起きてくるのでした。私は、私で、エンプラ闘争（'68）以来の市民運動にほぼかかり切ってきたつもりだけど、それは運動の高揚をかちとるといった性格のものじゃなかったし、私もいいかげんにやって来た。そのうち、今の妻（といっても初婚です。モチ）と一緒になってから、状況が変化して来たという訳。

彼女は元々活動家じゃないし（生まれつきカツドーカという人はいないが！）、私が「教育」したのでもないし、（女を教育できない男は半人前?!）いわば活手に、自然に、彼女は活動を始めたのでした。自分の友人を中心に、「創造する女の会」というグループを作り、無農薬やさいの共同購入、合洗追放、生協、障害児の教育権等々と、彼女たちを核にした（更に輪が拡がりつつ）運動が、この基地の町に生まれて来ている。私は男として、彼女たちに追随し、いつも多数の女のなかの黒一点として、まるで「ハレム」じゃなかった、来るべき社会の顕現を体験していたのです。機関紙を作るムスケル（懐かしい!!）、ボロカローラでの廃鶏の運搬、子守りとまさしく輝やける下請け生活に忙がしい毎日でした。

妻は、外に出ていれば、仲間とは顔を合わす機会が少なくなり、「仕事人間」に変ボーし、ついには疲れはてて止めたのは先に報告しました。帰ってみれば、自分の仲間は夫に「と」られていた訳で、なんとなく身の置き場のない日が続いたようです。三ヶ月がたって、まだ後遺症があるけれど、なんとかやれるのではないかと、夫たる私は思っているのですが、彼女はホントは気が弱い性格だというのが、このごろやっと解ってきたんで、いわゆる思いやり、気配りの毎日です。

……とやっと極私的な状況が、たっぷり出て来て、筆もなめらかになった。こんなレベルから、私はいつも考えていきたいと思う。そうなんだ。ハンカクやって食っていける訳じゃないし、問題

はどのように食っていくかということだし、一緒に食べる家族や地域のなかでの、人間のつながりを変えていくことだ、というのはジョーシキのようで常識じゃない、少なくとも男共にとっては。私は、そして彼女は私塾をして生計をたてているが、何の保証もないし、それよりも、もっともうかってパトロンになるのがヨイナアという夢はあるけど、それは夢だし、ホンマに借金が減らん。おっと、こんなことばかり書いていたら、ブルジョア思想に毒されたプチブル日和見主義とドヤされる。

労働組合、党などでは戦闘的活動家、家り帰ると帝国主義者という男たちを、私もまた具体的に知っているが、私はまた、変革された主体として、そんな男たちにかかわってゆくヒマがないので、もっと自分をきたえつつ、女たちの運動にかかわってゆきたいと思う。これはまさに"日和見"で、なぜって、女は太陽だから、ナンチャッテ、男たちに絶望してはいるのですが、今しばらくのご辛抱を。男たちと話していても、学ぶものは何もないが、女たちとの話しのなかで、私は成長してきたのだから。少しは。これは、ベンチャラでは、決して、ない。

やさいの会のことを例にとって、ちょっと考えてみよう。会は当然のごとく、右左ない訳で、誰でも入れます。そして誰でも抜けれます。今、会員は約百六十名。生産者は主に四名。会員のなかには某特別公務員もいたりして、すこぶる楽しいのですが、例会をすれば、生産者と手配の方一人、および私以外は女ばかり。女ばかりの共同体で作った食べ物を、男ばかりの消費者のグループがいただく、と忘想だけはするけど、しようがない。それに働く女性の会員も、午前中の例会（ウイークデイの！）には来れないし、でもま、将来はバラ色ですっちゃ。およそ三年で、やっと8月に総会もするし、大地に根を張った活動が育っていくだろう。他所でもそうだと思う。反核・反戦運動といっても、それを根っ子で担っているのは、こういう人々だろう。そこではスローガンではなくて実際その人はどんな生活をしているのか、でんとのつき合いがあるだろうし、自分の言葉で話すことができるし、行動ができてゆく。

そのように思えば思う程、私はまた情けなくなってゆく。それは、やはり私が男であるからであろう。男のオロかしさ故か、それらの様々な運動がより合わさりつつ、全国の「政治課題」ともなれば、それこそナンセンスな論争があり、ワンパターンの行動が組まれてゆく。そしてそれが、政治的アパシーを生んでゆく。その典型として「内ゲバ」なるものもあるであろう。

であれば、ここは女の出る幕なのではないか。女が様々な困難さを山程もかかえ、とてもそんなヒマごとにつき合ってはおられない気持は、私とて解る。佐世保に於ては、政治闘争にノコノコ出かけるアホな女はいない。毎日の生活をいかに乗り切るかが切実であるし、ウエンな政治に引っ張り回されるのは、誰しもかなわんであろう。といっても現実に男が政治をとりしきり、経済のしくみにあぐらをかき、性的にいばりくさるという図式は、男では破れない。

またまた、悪い男のクセが出た。極私的なんていいつつダメですネエ。こんなことなんかどうでもいい。それよりも、妻とよく話さなくっちゃ。アレも、生活も、育児も、ウンドーも二人でするんです。それに、生協の班がなくなっていたんだし、近所にもう一度つくること。おまけに、SSK労愛会まる出しの生協に体当たりで改革しなくちゃならないし。全盲の女児、田頭亜希子ちゃんの就学問題は険ゲ峰にずっとあるし、8月には車検に出さなくちゃ、自動車税、国保etcと滞納分はどうすんだ、借金は返さなければ……とムウ、混乱して来た。

と、佐世保を〝代表〟してこんなノタウチまわるようなレポートでは、長崎のみなさんの失笑を買うおそれもあるので、最後に格調高くいきたいと思う。私たちの、日本でのサヨク的な運動の欠陥を克えようという試みは、何も始まってはいないし、誰も注目してはいないが、全国にまだ見ぬ〝同志〟へ同好の士？）がいるものと思われるし、私の思想を開陳しておきたい。それは「生活オ一、政治はオニ」というもので、某国卓球代表団みたいだが、私はそのことを断呼として実践してゆきたい。（何もえらそうに言うことはない!!）

このことについては、先日、横須賀に行った折、彼の地の新倉さんと激論になり、まだ決着がついてません。しかし、横須賀の人々も、ホントは佐世保と同じことを考えておられるようで、私も、もっとよく考えないといけない。自分の頭でよく考えてみなさいと、塾の生徒に言ってるばかりが能じゃない。一人で考えるより、二人で。そして多くの人々の知恵が、地球を救う。愛だけでは救えません。私にとっては、毎日が大切だ。生きることのシビアさのなかから、行動をしてゆきたい。

ちなみに私のもう一つのスローガンは、

Save the Money. Save the earth!!

でした。

トマホークとは何か！

トマホークは米海軍が開発した巡航ミサイルで、本年六月より太平洋艦隊に実践配備が始まった。従来の太平洋艦隊で、地上を核攻撃できるのは空母に搭載した攻撃機以外になかった。が、トマホークの出現により、潜水艦からも地上が攻撃できる。ソ連は勿論、アジアの各国が核攻撃の目標となる。

トマホークには核と非核があるが、核弾頭はわずか一二二kg。長崎の原爆が五トンもあったのを思うと著しく小型。しかし、その威力は広島型原爆の一五倍の破壊力をもつ。しかも艦船から発射され一定の高度に達すると自力で飛ぶ。マッハ八〇（ジェット機とほぼ同速度）で、二五〇〇kmは飛ぶことができる。命中精度は半径二五m。沖縄の那覇市から北海道稚内の中学校のテニスコートをまちがいなく撃つことを意味している。

こんなトマホークを米国は一九九〇年までには五千基生産する。現在米国がもつ核爆弾が九千発なので、核の量的状況を一変させる。今後佐世保や横須賀に寄港する米艦船にも当然トマホークが配備されている。文字どおり日本が核基地となる。反核運動が高揚した西欧と状況は同じになった。

『なぜ、ストップ、トマホークなのか』

F・K

六月十九日に「なぜ、ストップ、トマホークなのか。」と題して勉強会をしてみました。わたしが主婦の感覚でまとめたトマホークの資料を読んでいただき、また、スライドをみての感想・意見交換をすることで、自分たちの意識や判断力を高めていけたらというのが目的です。

わたしは、現在、4才、3才、8ヶ月の子供を常に引き連れて、育事のあい間に家事をしている専業主婦です。ですから、連日のように新聞やテレビ、あるいは街頭で、反トマホークだとか、イラン、イラク戦争がどうしたこうした、米が汚染されてるとかを見、聞きしては、正確なところを知りたいと思いつつ、その日その日の忙しさを理由に、かかわりきれずにいました。そんな折、トマホークについての市民団体の作った小さな本が三冊程手に入り、読むうちに、今迄の「核はこわい。」という漠然としたものに一つ区切りをつけ

アメリカの計画するトマホーク日本配備の意味を一人でも多くの人が認識し、正しく判断し、表現しなくてはいけないと思いました。そして、わたしでもできることは何かと考えたとき、まずは、

トマホーク日本配備の意味を簡潔にまとめ、身近な人に読んでもらおうと思ったのです。

「女が変われば社会が変わる。」その理想へ向けての第一歩として、まずは問題の中身を知ること。それを横へ知らせること。そして、自分なりの意見と意志が持てたとき、ようやく、一人の人間が動きだせるのかもしれないと思ったのです。

三年程前に、「見つめなおそう佐世保の平和」と題して、当時、話題になった「侵略」のフィルムを上映し、わたしたちの生活は平和であることを前提に動いていることを認識し、基地のある街の住人としての責任ある態度とは何かを話し合おうと、全新聞社をまわり、街頭でビラを配り、自作のアンケートをまとめ、意気込んだのに、当日の一般の参加者は零人で、「佐世保の人間は何を考えているのか。」と腹をたてたことがありました。卵が安いといっては早朝から列を作り、バーゲンセールには遠くからでも駆けつけてくるのに、自分たちの生活を、もっと大きな視野で考えられないものかと……。でも、ようやく、この年(三十一才です)になって、学生気分が抜け、家庭を守る主婦たちの気持を一歩引いて見られるようになりました。人が自主的に動くためには、内面からのエネルギー作りが必要で、そのためには、一人一人の女たちが、社会の出来事の内容を正確に知ることから始まるだろうと、今は、確信しています。

その一つの方法として、先日のトマホークの勉強をしたわけです。そしてこのことは、わたしでなくても、だれにでもできることなのです。わたしたちが、中学校頃までに受けた教育の復習です。「何ページまでのことをまとめよ。」の宿題と同じことをしただけです。今、母親たちは、自分の子供たちに良い教育を受けさせようと熱心なようですが、自分たちが受けた教育を自分の生活の場で生かすことを忘れていませんか。どんな授業が印象的だったか、役に立ってるかを考えなおしてみたら、子供たちにどんな教育を受けさせてやりたいかというのも変わってくるかもしれませんね。

(少し寄り道をしました。)

十九日当日は、無農薬野菜の会や全盲の田頭亜希子ちゃんを普通の小学校へと応援する会の知人に加えて、「こういう集まりを待ってました」と初めて出て来てくれた人々、また、事前にわたしの資料を読んで、興味を持って集まってくれた子連れ主婦達、約三十人。「トマホーク」のスライドを見た後の討論会では、生活に密着したところからの政治に対する不満や、平和をおびやかすものへの怒りの意見が出ました。

わたしが、この行動をおこしたことに対しての

感想としては、集まって下さった一人一人の第一歩を大切にしたい。そして、こういった勉強会は、だれにでもできることを知ってもらい、これからは、多くの人が、自分の得意な分野、得意な方法で、自分の知識を隣りの人へ伝えていく運動にしたいと思っています。社会の底辺にあるのは、一つ一つの家庭であり、それを引き受けているのは、わたしたち主婦です。わたしたちがしっかりしなくては、わたしたちの声が表面に出てこそ、本当に住み易い社会になるのではないでしょうか。「女たちよ、おおいに勉強して、発言して、よりよい社会を創りましょう。」

『被爆者と生きて』

T・E

「核実験に反対する長崎市民の会」の平和公園での座りこみに本格的に参加したのは今年の冬からです。それまでは、私が行っていいのかなという感じもあったのですが、子供の世話も手を離れたし、うちの人（配偶者・谷口稜曄さん）が一緒に行かないかといったのをきっかけに行くようになりました。少しでも自分にもできることをしたいという気持があったので、やるからには皆勤したいと思っています。うちの人の職場の人は「ご主人がいったから来たんですか」といわれますが、「うちの人がいったからではありません。私の意志で来ています」と答えます。私は敗戦の年に南朝鮮から引き揚げて来たので、被爆はしていませんが、結婚して二十八年、うちの人がどんな思いで生きてきたかを見ていますから。

結婚は、お見合いのようなもので、周囲からせかされて決めました。うちの人の身体の状態については、顔と手に傷がある位しか聞いていませんでした。新婚旅行の時、旅館に着くなり背中を流してくれといわれ、なんでかなと思いましたが、背中の傷を見てもらいたかったんでしょうね。私の母はそのことは全く知らなかったけれど「辛抱

できなかったらいつでも帰ってきていい」と言いましたが、私はその時、この人の面倒をずっと見てあげたいと思いました。でもうちの人の身体の痛みはうちの人にしかわかりませんから、「あなたのことはあなた自身にしかわからないのだから、自分自身で大事にして下さい。私のことは私自身でやりますから」といつも言ってきました。

妊娠した時はとてもこわかったです。丈夫な子供が生まれるだろうかとか、ちゃんと生まれるだろうかとか、生まれてくるまで心配でたまりませんでした。女の子が生まれ、その子も結婚して孫もできましたけど。二人目の時も同じように不安でしたけど、男の子で、もう大学を卒業して働いています。幸い、女の子と男の子が生まれたのでうちの人が「三人ぐらいいてもいい」と言ったけど、やはり不安の方が先で、子供は二人だけです。うちの人は、私には直接は言いませんでしたけど、子供をつくることについても悩んでいたようです。今でもずっと、うちの人がお風呂にはいる時は、背中をそっとなでるように洗ってあげます。やさしくしているつもりでも痛がりますね。本当に痛いんだろうと思います。

子供達が成長して、海水浴に連れて行ったりする時は、陽にあたれば痛いだろうし、本人も人に傷を見られるのがいやだろうと思って上にはおるものを縫ってあげて、それ着ていましたが、うちの人はだんだんそれを着なくなりました。傷を見せなければ、人にもわからないからっていって。私の実家の田植えの手伝いの時に、私の母に背中をはじめて見せた時、うちの人は私の母に「背中を見て」といって服を脱いだんです。母はそのことについて私には何もいいませんでした。ただ、彼がやさしいから私のような人間でもつとまるんだというようなことを言いましたね。うちの人は私の母にも背中の傷をみてもらいたかったんだと思います。私は、母が余計な心配をするだろうから見せなくてもいいのにとも思いましたけど。

子供達がうちの人の傷のことを聞いたのは、ふたりとも幼稚園の時でした。その時、被爆したことを子供に言いました。それからは、家庭で原爆について特に改まって話をするということはありませんでしたが、子供達は、父親の生活の全体（仕事、労働組合、被災協）を見て何かを感じていったようです。父親に対して、身体をいたわるような接し方をしていましたね。ほんとうに小さい頃でも。

下の子供が一才位の時に、うちの人は全身麻酔で手術をしましたが、その時医者に「生命の保障はできません」と言われ、その時は本当に覚悟しました。うちの人も、「もしもの時は、原爆病院

か大学病院で解剖してもらうように」って言いました。ほんとうに痛いめにあってきたんですね。原爆にあってその後もずっと。かわいそうな人です。ほんとうに。痛いめにあいながらも人一倍他人の世話をしたい人ですね。人のために生きてるような人かなと思います。冗談半分に自分のことを「国宝」って言っています。こんなふうに言えるようになったのも最近のことです。子供達が大人になってからですね。

どうして座り込みに参加しているのかと聞かれてもきちんとは答えられないけど、結婚してからの生活のすべてが被爆と切り離せないものだったからでしょうか。明日どうなるかわからないという思いで毎日暮らしてきましたから。

うちの人は、自分が生きている間に被爆者援護法と被爆二世の問題は何とかしたいと思っていますから、「負けられない」っていつも言っています。長生きはしてほしいけど、私より後には残ってほしくないですね。私が残って面倒を見てあげなければと思います。でも最後まで生きてほしいとも思いますけど。何でも片付いてしまっていたらいいですけど、一生懸命やっていることが何もできずに先にいかれてもとても心残りですから。

（インタビュアー　K・Y・）

原爆の図

ながさき展

■期間
8月8日(水)
－12日(日)
午前10時－午後8時
最終日は午後7時

■会場
長崎市民会館
展示ホール
(電車・バス
「公会堂前」)

■入場料
大人　前売¥400
(当日¥500)
中高生　前売¥200
(当日¥250)
小学生　¥100